

## 第7章 高齢者学習支援の事例研究

以下のところでは、全国的にみて注目されると思われる高齢者大学あるいは高齢者学習支援の場の事例を示していきたい。事例紹介に関しては、各々の高齢者大学などへの面接調査を行い、その結果をふまえて紹介していく。

筆者らはこの研究期間内に、国内外のいくつかの高齢者大学や教育・福祉行政機関を訪問し、これらに対するインタビュー調査などを手がけてきた。2015年4月から2017年11月までの間に、訪問調査を実施した高齢者学習支援の機関は次の図表7-1のとおりである。以下、これらのうちのいくつかのものを紹介していきたい。なお、以下の記述にさいしては、調査対象地での職員の方々へのインタビュー調査内容とその機関のパンフレットや冊子、およびその機関のホームページなどをも参照していることをお断りしておく。ホームページや冊子などは、訪問年度を中心としつつも、必要に応じて新しい年度のものへの組み替えも行っている。

図表7-1 訪問調査の対象地

対象地名	訪問日	所管など	選択の理由など
ながさき県民大学	2015年4月30日 (木)	長崎県教育委員会	離島部を含む県民カレッジ
北名古屋市昭和日常博物館	2015年6月16日 (火)	愛知県北名古屋市	高齢者に対する回想法の実践を行う歴史民俗資料館
山梨県ことぶき勸学院(甲府市)	2015年6月19日 (金)	山梨県教育委員会	日本唯一の長寿学園(県教育委員会系列高齢者大学)
松江市古志原公民館・法吉公民館	2015年9月28日 (月)	松江市教育委員会	公設自主運営、循環型公民館、防災活動を柱とする公民館
出雲市ひかわ図書館	2015年9月29日 (火)	出雲市教育委員会	図書館での高齢者への回想法の実践(暖炉の部屋)
千葉県生涯大学校(千葉市)	2016年2月23日 (火)	千葉県健康福祉部	全国最大規模の福祉行政系列の県高齢者大学
かごしまねんりん大学	2016年3月2日 (水)	鹿児島県社会福祉協議会	地方都市の県レベルの高齢者大学
やねだん(鹿屋市串良町柳谷の集落)	2016年3月3日 (木)	自主運営	行政から自立して、高齢者により地域ビジネスを運営
鹿児島県志布志市志布志創年市民大学	2016年3月3日 (木)	志布志市教育委員会	まちづくりと生涯学習を一体化させた市民大学

韓国ソウル市西区 シニア・センター	2016年6月13日 (月)	ソウル市など	ソウル市内における代表的な 高齢者大学
静岡県清水区清見 潟市民塾	2016年8月3日 (水)	自主運営	市民講師制度にて高齢者が教 える側に立てるシステム
群馬県高崎市公民 館	2017年3月7日 (火)	高崎市教育委 員会	公民館における終活講座の代 表例
千葉県佐倉市公民 館	2017年3月15日 (水)	佐倉市教育委 員会	公民館市民カレッジにおける 高齢者の学び合い講座
韓国城南市盆唐区シ ニア福祉センター	2017年8月23日 (水)	韓国城南市な ど	高齢者大学の日韓比較調査
NPO法人新しいち ょう大学校	2017年9月26日 (火)	高齢者による NPO	大阪市いちょう大学廃止にと もない再出発した高齢者大学

## 1. 昭和日常博物館（北名古屋歴史民俗資料館）

2015年6月16日に訪問。館長の市橋芳則氏にインタビュー調査を行う。この施設は北名古屋市立図書館の3階部分を占める。2002年度より回想法の実践を取り入れた資料館になっている。館内では、昭和30年代から40年代の生活用品やおもちゃなどの展示（ほぼ1万点）とともに当時の生活空間が再現されている。市橋氏によると、電化製品の普及などにより、この時期に人びとの生活が大きく変化したということであり、その変化を記録しているというのであった。

高齢者の学習との関連では、地域内外の高齢者の団体を、デイサービスや特養での見学会などのかたちで招き入れる「お出かけ回想法」が行われている。そこには、高齢者たちが自分の生きた時代に出逢ったモノや風景と再会する感動を共有することで、自身の人生につながりと意味の感覚を創出するというねらいがあるものと考えられる。とくに高齢者の心を揺さぶるという点で感情を活性化するという効果があるとのことであった。この点は若者も同様で、若者に経験はなくても感情は動くということである。

回想法実践は、もともとは福祉領域の介護予防事業ととらえられていたが、健常者への適用を示すという意味で教育的な特徴もある。博物館という側面もあわせもつため、博福連携事業としても位置づけられ、市の条例の中にも回想法事業が組み込まれている。

## 2. 山梨県ことぶき勸学院

2015年6月19日に訪問、事務局長の高井靖子氏らからお話を聞く。1989年に誕生した文科省・都道府県教育委員会系列の高齢者大学である長寿学園も、その後の行財政改革などにより、今日ではそのほとんどが姿を消している。そうしたなかで現在もその活動を継続しているのがこの学院である。現在は、県教育委員会系列の山梨文化学習協会が委託運営を行っている。山梨ことぶき勸学院も他と同様に、2011年に外部評価を受け、経費がかかるなどの理由により見直しが迫られた。しかし規模縮小はあったものの事業は継続された（大阪府の場合は逆に、「効果があった」

という報告を受けつつも廃止となっている)。福祉行政系例の場合との関係では、こちらが先にできたため、他をつくる必要がなかったとのことであった。

ことぶき勸学院の講座受講対象者は、原則として60歳以上の県内在住者で、再受講は可能である。受講者の平均年齢は70歳前後である。講座は1年制で年25回の授業があり、必修講座と選択講座がある。選択講座のなかに社会貢献活動と自主企画講座があり、後者は受講者が判断して内容を決め職員などが確認するという方法を取っている。そこでは、公民館講座や教育行政以外の部局が提供する学習の場や大学の公開講座なども、本講座の単位となり、県民カレッジの様相を呈している。理想的には学習と仲間づくりをとおした、社会参加する高齢者の育成という視点がある。なお、山梨県で長寿学園が継続している理由としては、同県が甲府市を中心に円形に近い形をしている地勢的要素もあげられよう。

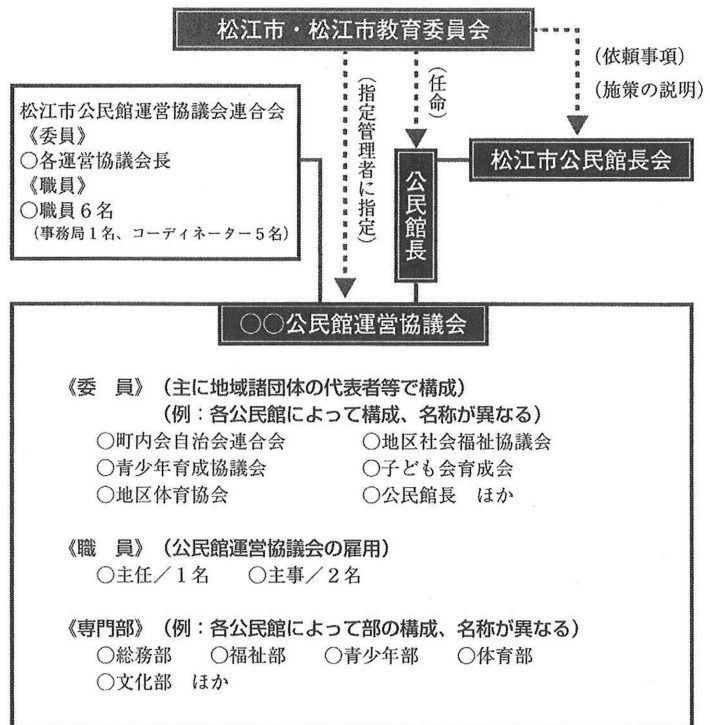
### 3. 松江市古志原公民館

2015年9月28日に訪問。古志原公民館長竹谷強氏から説明を受ける。松江市では地域が5つの公民館ブロックに分かれているが、ここは南部の松南ブロックに位置する。現在全部で32館の公民館があり、小学校区に1つの公民館がある。この公民館の最大の特徴は公設自主運営方式にある。元々は教育委員会直営であったが、1965年より各地区の団体などで構成された公民館運営協議会（事務局は松江市教育委員会生涯学習課内）の自主的な運営に委ねる方式に移行している。この方式は全国でも松江市のみで採用されている（図表7-2参照）。この方式の特徴は、公民館が地域住民の活動の拠点となることにくわえ、「住民が直接運営に参画」「住民が公民館運営費の一部を負担」「社会教育の領域をこえた事業の展開」という点にある。また2005年度からは近隣の郡の合併を行い、翌年度から指定管理者制度を導入している。

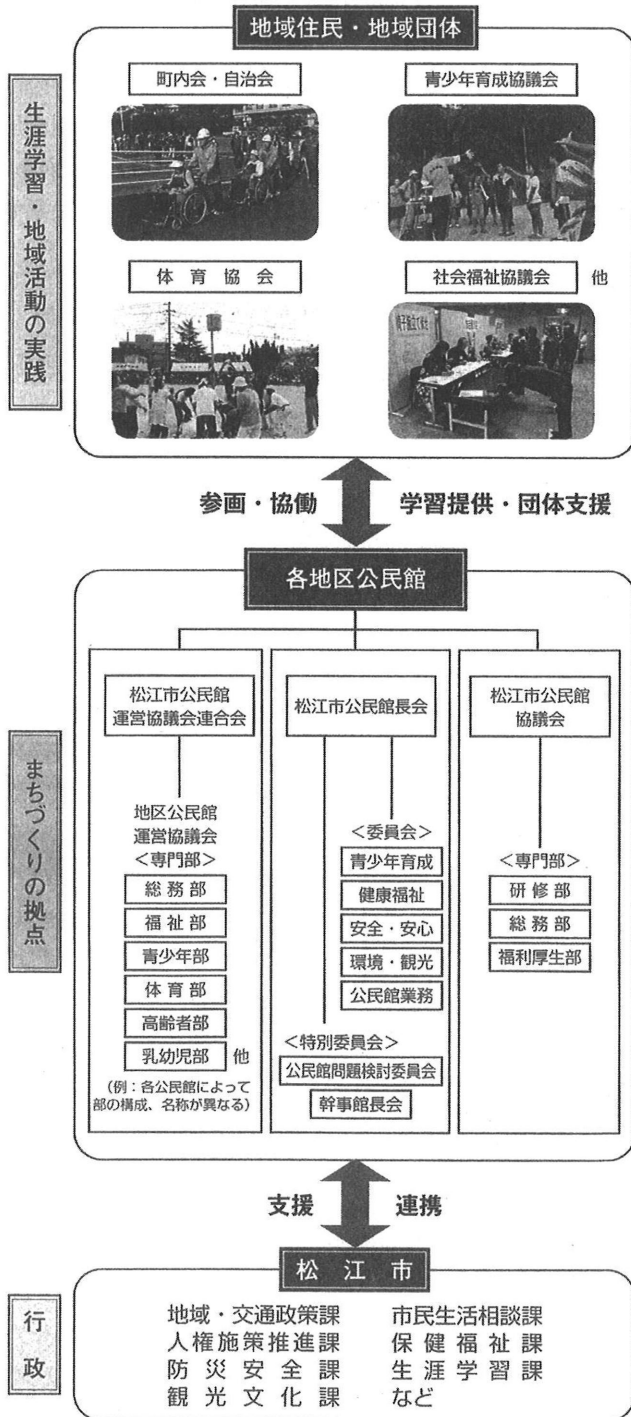
公民館の指定管理者である運営協議会の事業に対しては、見直しはされるものの、他の団体に運営を代えることはない。管轄は市長レベルで行われ、指定管理者に対して一括して費用が支払われる（公民館運営費は2013年度で

図表7-2 松江市公民館の公設自主運営方式

#### 組織図



公民館を拠点とした生涯学習によるまちづくり



4億5千万円強)。福祉領域に支払われる費用も含まれるため、全公民館に社会福祉協議会の事務局がおかれている。そのため全公民館で、4人の職員体制が組まれている（館長は非常勤、他の3名は正職員のうち1名は福祉の仕事にかかわる）。地域のお金でその地域に合った事業を行い、運営協議会で職員を雇っている。また地域住民からも負担金（1世帯で800円）を供出してもらっている。

古志原公民館の活動の特徴は、世代間交流による循環型社会をめざすという点にある。公民館のすぐ横には幼稚園と小学校があり、高校も近くにある。そのため子どもが自由に入出入りする公民館という特徴がある。子どもの活動を高齢者が支援し、そうして親世代をも巻き込むというかたちで世代間交流が図られている。子どもを核にして地域がつながるといった視点がそこにある。高齢者はしめ縄づくりや竹細工、行燈づくりなどの地域の生活文化を子どもたちに伝えている。

この世代間交流事業の一環として、例えば宍道湖でのハゼ釣りが行われるが、これは公民館の事業であるとともに福祉の事業にもなっている。公民館は地域育成を担う教育施設であるとともに福祉施設でもあるという理解がそこにはある。

竹谷館長によると、松江市の高齢者は地域活動に積極的に取り



組む層と孤立化に向かう層に二極化しているとのことである。都市部から定年退職後地方都市に還った高齢者を、その地域でいかに地域住民につなげていくのかが大きな課題だということであった。

#### 4. 志布志市創年市民大学

2016年3月3日に訪問。鹿児島県志布志市は、1995年度より市の文化センター内に生涯学習センターを設置したが、これはあくまで機能としておかれた組織という意味であった。2004年からは志布志創年市民大学が開校されている。地方都市の少子高齢社会化という動向のなか、2つの志と布（人材）を育むという目的のもと、「創年と子どものまちづくり」「地域学から始まるまちづくり」という2つの志を掲げている。

創年大学の講座は1年間15回の授業から成り、受講料は年間4,000円である。受講対象者は原則として高校生以上の市民であるが、結果的には中高年の受講者が多い。受講終了後は「まちづくり仕掛人」に認定され、人材バンクに登録されて地域づくり活動の場が紹介されたりする。このほかに自主研究グループなどもあり、しゅし創年団や地元学実践など、ユニークな活動も進められてきている。

#### 5. 静岡県清水区清見潟市民塾

2016年8月3日に調査を行う。事務局長の澤野裕行氏や塾長の大田静苑氏らにインタビュー調査を行う。清見潟市民塾は、1985年に清水市（当時）教育委員会の支援のもとに、当初は高齢者の学習支援団体として、市の公民館を中心に、市民が市民を教えるシステムを構築した組織である。しかし2003年に清水市が静岡市に合併されてからは、清水区のみ活動となっている。公民館は清水区では生涯学習交流館と名称変更し、旧静岡市では生涯学習センターと名称変更をして区別している。管轄も教育委員会ではなく市民局生涯学習推進課となり、文化振興財団が指定管理者となっている。

このシステムの大きな特徴は市民講師制度、つまり市民が教える側に立つという点にある。講座は月に1回から2回、1年間かけて清水区内の21の生涯学習交流館などで行われ、受講料が講師の謝金に連動するというシステムがとられている（そのためNPOにはなっていない）。学ぶ生きがいととも教える生きがいをも提供するところにそのユニークさがあるといえる。現在140ほどの講座が開講されている。講座は月1回あるいは2回開かれ、受講料は月1回で年7,000円（受講料4,700円、運営費2,300円）、月2回で年13,000円（受講料9,500円、運営費12,000円）で、このうち受講料は講師への謝金となり、運営費は事務局に納められる（例えば月1回講座で受講生15名の場合、講師の手取りは70,500円となる）。

受講者は8割くらいが女性で、年齢制限はしていないが、60代および70代がほぼ4割強ずつである。講座内容は健康系や趣味系のものが多い。年齢制限はないがピアノ講座だけは、地域のピアノ教室などへの影響を配慮し、50代以上の受講者年齢制限を設けている。

#### 6. 佐倉市中央公民館市民カレッジ

2017年3月15日に訪問。中央公民館館長江波戸寿人氏、顧問の内田儀久氏らから説明を受ける。

千葉県佐倉市には公民館が6館あり、教育委員会各課と同列におかれている。高齢者教育の実績では、1971年に長寿大学がおかれたのを皮切りに、1978年には高齢者短期大学校がおかれ、その後1992年に4年制の佐倉市民カレッジがおかれるようになる。中央公民館にはカレッジ棟がある。入学条件は40歳以上の佐倉市民で、60歳以上が80名、60歳以上で2回抽選に漏れた者10名、40代から50代が10名という内訳となっている。受講料は無料で、1学年の定員は100名である。平均年齢は60代後半くらいだそう。

市民カレッジの1年と2年は「であい課程」とよばれる教養課程で、5月から2月まで毎年ほぼ32回の講座が組まれる。3年と4年は「専攻課程」で、年20回くらいの講座が組まれている。

図表7-3 佐倉市民カレッジにおける学習内容

【第1学年・第2学年】であい課程（共通学習） 授業日数：年間32日程度

学習目標		自己発見 (自分とのであい)	仲間づくり (仲間とのであい)	郷土愛 (地域とのであい)
学習課程		学 習 内 容		
第1学年	であい学習	1) 公民館で学ぶことの意義について考える 2) 新たな自分や多くの仲間、知らなかった地域とのであいを広げる 3) 生きがいについて考えていく 4) 一般教養		
第2学年	話しあい学習	1) 郷土を学び、理解を深める 2) 市政を学び、まちづくりについて考える 3) まちづくりについて行動のための具体策を話し合い、支え合い、実践発表する 4) 自助・互助・共助・公助のあり方、協働によるまちづくりを学習する 5) 一般教養		

【第3学年・第4学年】専攻課程（コース別学習） 授業日数：年間20日程度

コース		あったか福祉コース	ふるさと歴史コース	さわやか情報コース	ゆっくり元気コース
学習目標		健康を保持しつつ福祉について幅広く学び、地域の福祉を推進できる	郷土愛を育み、心豊かで品格高く、地域の主役として活躍できる	情報収集・発信技術を活かし、情報化社会に対応していく力が備わる	健康づくりの実践を通して、健康でいきいきとした生活ができる
学習課程		学 習 内 容			
第3学年	深めあい学習	であい課程の総合学習から、4つの専攻コースを通して学習を深めていく			
第4学年	学びあい学習	専攻コースの学習をさらに深め、学習したことを他に教えることにより「学び」を一層深めていく			

※専攻課程についてはコース名及び内容など、変更する場合があります。

【全学年合同】文化祭・スポーツフェスティバルでは、生徒が実行委員として運営に携わっています。

そこには「であい（学習）→話しあい→深めあい→学びあい」というすじみちが構想されている（図表7-3参照）。

コースは、「あったか福祉」「ふるさと歴史」「さわやか情報」「ゆっくり元気」の4コースから成る。この4コースは開学当初から変わらず、そのなかに適宜、時代に合う内容が組み込まれている。修了後は（佐倉での）地域活動に取り組むことが求められており、そのために公民館が教育的な働きかけを行っている。修了後の再受講は認められていない。一方で、毎年100名ずつ新規の入学者が誕生している。

この市民カレッジのカリキュラムには大きな特徴が2つある。ひとつは第2学年で学習する「私たちのまちづくり」という学習内容である。これは、卒業後のまちづくりの実践に向けて、1年間かけて、グループごとに参加したいと思うまちづくりのあり方を提案し、その実践発表会と報告書をつくることを進めていくというものである。

図表7-4 平成28年度 佐倉市民カレッジ 第4学年学習予定表

専攻課程 ふるさと歴史コース（2）

学習時間		午前10時～11時50分			午後1時10分～3時		
番号	日・曜日	学習テーマ	学習内容	講師	学習テーマ	学習内容	講師
13	10.28 (金)	学び合い学習 (3)	元気コースによる 健康づくり	社会教育指導員	学び合い学習 (4)	福祉コースによる 家庭介護実習	社会教育指導員
14	11.4 (金)	学び合い学習 (5)	情報コースを招待して 佐倉の史跡案内	社会教育指導員	学び合い学習 (6)	情報コースによる パソコンイベント	社会教育指導員
15		カレッジ合同 生涯学習の 楽しさ(2)	【市民カレッジ文化祭・研究発表、学習発表、作品展示など】 11.16(水)～11.18(金) 会場 佐倉市立中央公民館 大ホール、学習室3他				社会教育指導員 公民館職員
16	11.19 (土)	カレッジ合同 生涯学習の 楽しさ(3)	【市民カレッジ文化祭・舞台発表】 会場 佐倉市立中央公民館 大ホール				社会教育指導員 公民館職員
17	11.25 (金)	自主企画講座 (2)	学生がテーマを決めて 企画し補習学習する②	社会教育指導員	自主学習	学生がテーマを決めて 自主的に学習する	社会教育指導員
18	12.9 (金)	地域活動	これからの博物館で必要なこと・歴博を楽しむ 【国立歴史民俗博物館を見学】 集合 9時40分 国立歴史民俗博物館 15時現地解散予定				国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩
19	1.13 (金)	学習のまとめ	研究レポートの発表	社会教育指導員	ホームルーム	卒業に向けて	社会教育指導員
20	1.20 (金)	4コース合同 学ぶことの 意義	学んだことを活かす —各コース代表発表—	社会教育指導員	4コース合同 総長講話	佐倉の歴史から見た まちづくり	総長
21	2.3 (金)	4コース合同 講演会	考古学からみた 日本人としての生き方	明治大学名誉教授 大塚初重	4コース合同 式典予行	卒業式練習	社会教育指導員
22	2.10 (金)	カレッジ合同 式典	卒業式	総長 館長		*	

もうひとつは、4年次に行われる「学びあい学習」である。これは4つのコースそれぞれが他の3つのコースの受講者を招いて、自分たちの学習したことを教え合うというスタイルの学習内容である(図表7-4参照)。受講者が先生となって教え合うのであるが、そのためにコース内容をさらに班分けし、役割分担を決めていく。とくに情報コースでは卒業生も加わり、ボトムアップをしながら進められている。

こうしたカリキュラムのもとに、公民館と受講者との間を取り持つのが4名の社会教育指導員である。主に退職をした教育関係者が、自身のPTAでの経験などを活かして、学習がスムーズに進行するように調整役を担っていく。

## 7. 大阪市新しいちよう大学校

大阪府高齢者大学は2008年に府の事情によって廃止となったが、同様に大阪市の高齢者大学であったいちよう大学も2013年度で廃止となり、2014年度よりNPO法人新しいちよう大学校が誕生している。この理事長の巢山靖司氏に、2017年9月26日にインタビュー調査を行った。

いちよう大学は、1970年代後半から大阪市の高齢者大学として30年の活動を続けてきたが、2013年度の城北生涯学習センター廃止とともに、当時の橋下徹市長の行財政見直しのなかで廃止となった。そこで旧いちよう大学の講師3名が中心となって、新たなNPOによる新しいちよう大学校が創設された。大阪府高齢者大学校と同様に、年齢制限と地域制限が取り払われ、受講料年35,000円の年27コマ(講義20コマ、シンポジウム2コマ、合同講義5コマ)のコースが立ち上げられた。大阪府の高大と大きく異なるのは、ここでは勉強中心の高齢者大学で、地域貢献活動などはカリキュラムに組み込まれていないという点である。年をとっても勉強しようという高齢者中心の組織だということである。巢山氏によると、シニアリーダーなどの養成コースを受けてもなかなか声がかからないという問題もあるということであった。

継続受講は可能で全体の4割が継続受講者だということであった。コースは、英語、伝統・芸能、音楽、歴史と大阪、国際理解の5コースで、定員は各コース30名ずつである。開催場所は、大阪市立難波市民学習センターで、主に月曜日と火曜日に講座が開かれている。なお大阪市は後援のみを行っているが、同センターの利用には、同大学校が比較的優先的に使わせていただいているそうである。また橋下改革では旧来の教養型高齢者大学には予算をつけないという方向が示されたが、現在大阪市立総合生涯学習センターでは、そうした方向とはやや異なり、防災や地域づくりなどを軸とする、新たなまちづくり市民大学(いちようカレッジ)が開設されてきている。

## 8. 群馬県高崎市中央公民館における終活講座

2016年3月7日に訪問し、主査の大野雅美氏らにお話をうかがった。高崎市は人口375,000人規模の都市で公民館が44館存在する。そのうちの中央公民館では、2015・2016年度で終活講座を開催していた。とくに2016年度には、相続、エンディング・ノート、葬儀などのテーマの5回の講座を組んでいた(2017年度は4回)。講座は終活あんしんネットワークという団体が運営し、2017年度は高崎市終活アドバイザーが運営していた。職員の方は、当初はエンディング・ノートの講座を考えていたが、結果として終活全般の講座になったと言っておられた。

注目したいのは受講者の平均年齢が70代であり、受講者56人中8人が80代、27人が70代だとい

うことである。後期高齢期の方の受講が多く、自身の人生の最終段階と向きあうという重い学習課題の場となっていた。終活のきっかけでは、自身の親を亡くしたり病気になったりした経験があげられていた。なお近隣の他の地域では東日本大震災経験がきっかけで終活講座に参加し出したという高齢者もおられた。

## 9. その他の事例

訪問調査では上記の学習の場以外にも、図表7-1のような場を訪問調査している。紙幅の関係により、以下簡単に述べておく。

ながさき県民大学は、県教育委員会が管轄する県民カレッジのひとつで、都道府県レベルの単位制生涯学習大学をさす。このカレッジのユニークな点は、離島部が多い長崎県において、さまざまな場における学習機会を組織化したという点にあるだろう。とくに離島部在住の高齢者に対して、県が学習のしくみを提供しているという点は重要な点であろう。

出雲市ひかわ図書館には「暖炉の部屋」という、思い出語りの部屋がある。北名古屋市昭和日常博物館と同様、回想法の部屋を組み込んだ図書館である。現在は主にボランティア・スタッフが地域の施設などに出向いて、図書館所蔵の地域の写真などを用いて思い出を語る事業を行っている。2003年に斐川町図書館として開館後、2011年には斐川町が出雲市と合併し、その後は館内での思い出語りの機会は縮小したそうである。

千葉県生涯大学校は関東圏での大規模な高齢者大学で、福祉行政の一環として高齢者大学の事業が組み込まれている。

かごしまねりん大学は鹿児島県の高齢者大学で県社会福祉協議会が管轄している。同県も離島部や山間部をかかえるため、受講者全員が一堂に会するのはむずかしいとのことであった。

やねだんは鹿児島県鹿屋市の柳谷集落地域で、そこの自治公民館を中心に、行政に頼らないむらおこし事業が展開されている。自主財源確保のためにサツマイモを栽培し、そこから家畜の糞尿の悪臭を除く土着菌やサツマイモ原料の焼酎を販売し、地域ビジネスを進めている。また空き家をアーティストに開放したり、子ども向け寺子屋を開設したりしている。

上記の多くの実践に共通している点は、高齢者の学習を地域での社会参加・社会貢献と仲間づくりにつなげている点である。しかしあわせて考えねばならないのは、こうした活動への参加者がおおむね70代に移行している点、および70歳くらいからこうした場に参加する人が多いという点である。それゆえ従来の「60代以上」という学習者の条件を見直し、高齢期をより細分化・深化させて学習支援を進めていくことも重要となろう。